

日本天文学会の創立 75 周年を迎えて

理事長 川 口 市 郎

日本天文学会が発足して天文月報第 1 巻、第 1 号が発行されたのは 1908 年（明治 41 年）4 月ということである。従って 1983 年（昭和 58 年）4 月に、日本天文学会は創立 75 周年という 1 つのエポックを迎えることになる。天文月報第 50 巻、第 1 号（1957 年、昭和 32 年）には当時の理事長鈴木政岐先生は日本天文学会創立 50 周年をむかえるに当たり、学会 50 年を人生 50 年にたとえ、孔子によれば 50 才にして命を知る（致命）、また西洋では 50 才にして rich（富裕）とあり、学会 50 年間の豊富な知識の蓄積があったと感想をのべられている。

日本天文学会の会員数は 50 周年で 820 名（特別会員 196 名；通常会員 624 名）であったが、昭和 57 年 3 月現在 2126 名（特別会員 518 名；通常会員 1570 名；賛助会員 38 名）に増加し、また春秋を併せた学会講演数は 106 から 395 と約 4 倍に増えている。この数字だけでも学会は着実に発展をしているといえる。

私にはこの 25 年間に生じた学問の質の変化は更に目覚ましいものであると思わざるをえない。1957 年といえば、ソビエトの人工衛星第 1 号機が打上げられた年であった。宇宙時代の開幕と共に観測施設の拡充・整備は目覚しく、1960 年には岡山天体物理観測所の 188 cm 鏡による本観測が始まったのを先陣として、1974 年には木曾観測所の 105 cm シュミット望遠鏡、1979 年飛騨天文台のドームレス太陽望遠鏡、さらに 1982 年野辺山宇宙

電波観測所の 45 m 宇宙電波望遠鏡等が完成した。これらの装置はいずれも世界的にみて第一級の観測装置である。また大気圏外からの科学衛星による観測とも相俟って、この 25 年間に日本の観測天文学は見事に開花したといえることができる。

天文学における理論的研究分野についても、電算機の発展は質的な変化をもたらし、若い研究者を中心として電算機を使いこなした研究が着実に躍進しているのは喜ばしいことである。天文学の真の発展とは自前の観測と自前の理論が有機的に結合してはじめて達成されるものであろう。このためには大型の観測器機と共に、厚い天文学者層の存在が必要不可欠であることはいままでもない。75 周年をむかえるに当たり、この 25 年間の苦闘の上になしとげられたわが国の天文学における理論および観測的研究成果を思うとき、これを受け継ぎ、更に発展させる責任は、いま、われわれの肩にかかっている。これを機に、尚一層研鑽に励み、切磋琢磨してゆきたいものである。

最後に、日本の天文学をここまで育ててこられた先輩諸賢に深甚な謝意を表わすと共に、次の 25 年間に現在の若い天文学徒が、人類の貴重な財産である天文学にさらに大なる貢献をすることを衷心より希望するものである。

75 年目を迎えた天文月報

成 相 恭 二

今年で天文月報は 75 周年を迎えた。創刊は明治 41 年 4 月である。読者諸兄も多くは第 3・第 4 世代に属しておられて、天文月報の年令に特別気も止めなかった方も少くはあるまい。筆者もそのような仲間の一人である。

昭和 32 年 1 月号に「天文月報 50 年の歩み」と題した下保茂氏の文がある。創刊のころ、大正から昭和にかけて、戦中戦後の 3 期にわけてまとめている。この稿はそれ以後のことについて記すことにする。なお創刊号表紙を写真で示す。

川口理事長の文にもあるように、この 25 年間は日本の天文学が大きく発展した時期である。それと共に本誌の内容も充実してきている。例えば第 50 巻は総ページ数 210、解説記事は 1 号に 1 つの割合に対して本 75 巻は 352 ページ、解説記事は 1 号に 2 乃至 3 の割合である。表紙も一色刷りから 2 色刷りになり、時々カラー印刷も用いられるようになった。2 色刷りは 55 巻（1962 年）からで、この年の 1 月号にカラー表紙が初めて用いられた。表紙写真が大きくなったのは 58 巻（1965 年）である。表紙にはなるべく日本で作られた観測装置の写